

# 新しい「居場所」から余暇を再編集する



Asada Wataru

豊かな余暇を生きるために欠かせないのは、家と職場以外の、もうひとつの居場所——。芸術文化の「場」をつくるユニークな催しなど、アサダワタル氏が手がけてきたさまざまな「日常再編集」の試みから、余暇の新しい可能性を探ってみよう。

## Part 6

Special Feature / Beyond ON-OFF

先だつてある企画で「いろいろ、かせぐ（稼ぐ）」というテーマのトークをした。人はお金だけじゃないいろいろな価値を稼いでいる、それに対し意識的になることで生き方・働き方が変わるのでは？——こんなことを参加者と語り合いつつ、筆者自身の仕事の変遷を紹介したのだが、まずもってこの「稼ぐ」という言葉の語源が気になったので調べてみた（\*1）。

稼ぐという言葉は（中略）紡いだ糸を巻き取る道具の「かせ」に由来する説がある。紡いだ糸をかせに巻くことを「かせぐ」という。そして、かせは休みなく動いているように見

えることから、かせのように仕事に励むことを「かせぐ」といったものと考えられる。また、稼ぐの「かせ」は「かせ（日迫）」の意味で、昼夜に迫り、止まる所を知らないことをいったとする説もある。

このように、稼ぐという言葉は、もともと日夜仕事に励むことを表しており、お金を得ることは後世になって派生した二義的な意味であったことがわかる。これはまさに筆者が語りたかったことで、語源的に見ても24時間、365日という限られた時間の中で、「稼ぐ」にオフタイムはないのだ、と気づかされた。文字通り、「あの人が

つも忙しそうにバタバタしているね」といったニュアンスではなく、「いまこの瞬間も自分は動き、何か」を常に稼いでいる」という「意識」の問題なのだ。この意識を持った状態で考えると、「働く（労働）」と「休む・遊ぶ（余暇）」との間にあるボーダーが、とても曖昧に感じられてくる。

### 家や職場以外の、第三の場所

また、余暇を語る上で重要な言葉として、「サードプレイス」を紹介したい。都市生活者にとって必要な居場所として、第一の場所（ファーストプレイス）が生まれくる過程で、筆者は「自宅を代表としたプライベートなスペースを、自分の好きなことをきつかけに無理なく他者へとちよつとだけ開く」活動を、2008年より「住み開き」（\*3）と名付け、その実践を提唱する取り組みを始めた。このように考えると、もはやどこからどこまでが私生活で、仕事で、趣味で、といったボーダー自体がいままさに日々更新され続けているのだ。

### 「ポスト余暇」を生きる試み

「稼ぐ」と「サードプレイス」という二つのキーワードから、余暇と労働を二分するボーダーそのものが溶解していつている様を語ってきた。そこから考えるべきことは、そもそもこの「余った暇」という概念そのものを再編集する知恵が今後求められていくのではないかということだ。それは、「余暇」そのものの意義だけでなく、新しい働き方、そして仕事を通じた新たな社会貢献の有り様をも考えるきっかけを發明していくことにつながるであろう。次頁では、いまこの時代に求められる「ポスト余暇」、すなわち本特集テーマである「本暇」を体現するためのレッスンの思考、および筆者が取り組む芸術文化実践について、写真とキャプションで紹介するので、どうぞ参照されたい。

イス）が「家」、第二の場所（セカンドプレイス）が「職場」、そしてその二つの中間地点にある第三の場所、すなわち「心のよりどころとして集う場所」を「サードプレイス」と呼ぶこの考え方は、1989年に米国の都市生活学者、レイ・オルデンバーグによって提唱された。日本においても現在、ほっこりくつろげるお洒落なカフェや、音楽や絵画が楽しめるアートスペース、地域の集いの場としてのコミュニティカフェなど、さまざまな形態のサードプレイスが存在している。実際、筆者自身もこの10年間、このようなスペースの運営にいくつも関わってきた（\*2）。その中で、とりわけここ数年感じることは、「サードプレイスが果たす社会的機能が、ファーストプレイスやセカンドプレイスの中に「織り込み済み」になってきている」ということだ。噛み砕いて言えば、家や職場自体に、家族や同僚を超えた新たなコミュニティが生まれつつあるというのである。例えば、シェアハウスやシェアオフィス、コワーキングスペースといった言葉を、昨今よく耳にされないだろうか。

家族以外の複数人と共に暮らすシェアハウスの存在は、とりわけ新しいものではない。しかし、筆者の学生時代であった1990年代後半〜2000年代初頭におけるシェアハウスの存在意義は、「一緒に住むと安く住めるから」という経済的な理由が圧倒的なも

のであった。しかし現在は、生活をシェアすることが、その人のライフスタイルや働き方の構築に強く結びつきつつある。つまり文化的な価値観や社会的な人脈を獲得するためのシェアに移行しつつあるのだ。筆者は2006〜10年、大阪市北区南森町の住居マンションの一室にて「208」というスペースを数人の仲間たちと運営していた。ライター、Webデザイナー、翻訳家、百貨店や映像制作会社の社員など6人ほどのメンバーが集う、シェアハウス兼シェアオフィスとしての取り組みであった。メンバーは各々が鍵を持ち、時に家として使い（泊まった）、風呂に入った、ご飯を作ったり、時に職場としても活用した（ノートPCを持ち込み仕事をしたり、打ち合わせ場所にした）り。あわせて、このメンバー同士が持っているスキルや人脈をシェアする意味も込めて、月に一度、メンバーの推薦によるゲストを招いてのトークサロンを開催。メンバー自らがパスタを作り、限定15名の一般参加者をホームページで募り、集まった者同士がゲストを囲みながら飲食を共にし、さまざまなことを語り合う場。その「場」づくりを繰り返ししていくことにより、異分野・異領域の人がとが自らの専門性の延長では築くことができなかった価値観の融合を生み出すきっかけとなった。また我々と同じように、生活や仕事をシェアする環境をオーガナイズする者同士のネット

Special Feature Part 6 / Essay



（\*1）語源由来辞典 <http://gogen-aidai.com/kasagu.htm>（株式会社レックス・バイス）より  
 「日本語源大辞典」（前田富祺監修、2005年、小学館）にも同様の記述が見られる。  
 （\*2）アサダワタル「築港ARC：多分野を繋げるアートリソース活用とプロジェクトメソッド創出」『アートインシアティブ』リリース構想（BankART1929編、2009年、BankART出版、180〜183頁）  
 アサダワタル「日常編集」『編集進化論』——『住み開き』編集進捗（仲俣暁生編、2010年、フィルムアート社、121〜138頁）  
 （\*3）「住み開き」——家から始めるコミュニティ（アサダワタル著、2012年、筑摩書房）



Project 4



ライブパーティー

「Club SHIDAX  
by  
KAROKEDISCO!!」

スナック風  
カラオケで  
出会いを演出

日本人の余暇的趣味の代表・カラオケをテーマに、カラオケボックスを借りきり本気でイベントをやった一例。参加者はプロのクラブDJ選曲のJ-POPで踊りながら歌いたい曲をリクエスト、順にマイクを回していく。カラオケボックスなき時代の“スナックスタイル”を現代的に採用、歌を通じ見知らぬ人同士の出会いの場を創出した。

主催：カラオケボックスの新しい使い方実行委員会

Project 3



ボードレス・アートミュージアム

「NO-MA」

表現の普遍を  
観る者に問う

近江八幡市にある昭和初期の町家を改装し2004年6月に開館した。福祉分野が生んだ美術館のユニークな試みとして、福祉施設で生活する知的障がい者の斬新な美術作品と、現代美術の気鋭の作品を並列に展示。福祉の世界の“余暇活動”で生まれた造形物は、その枠組みを超え、広く社会に表現の可能性を提起。筆者も運営委員の一人。

運営：社会福祉法人滋賀県社会福祉事業団

Project 2



ワークショップ

「コピーバンド・  
プレゼントバンド」

思い出の曲を  
子どもたちの  
演奏で贈る

高知県四万十市西土佐小学校で2012～13年に開催。児童クラブの高学年児童60人が「自分と同じ年くらいの時に最も好きだった音楽と、その理由」を家庭内インタビュー。結果から選曲し、コピーバンドを結成。最後は参観日を兼ね家族に演奏を贈る。地元のバンド経験者が指導するなど、普段の授業にない地域と家族と学校の出会いを演出。

主催：「トヨタ子どもとアーティストの出会い in 高知」実行委員会

Project 1



ワークショップ

「あなたの音楽を  
傾聴します」

音楽 CD を  
介して記憶を  
分かち合う

社会的マイノリティの立場に置かれた人をはじめ、多様な背景を持つ人びとが参加し、各々が選んだCDと曲を流しながら少しずつ言葉を紡いでいく。2012年に渋谷ギャラリー・ルデコで開催された。肩書きや容姿に対する先入観を可能な限り取っ払った状態でお互いに出会うこのような表現活動は、これからの余暇にも求められるのでは。

主催：津田塾大学ソーシャルメディアセンター

Project 4



湖と猫(仮称)

(滋賀県大津市)

改修した  
家を自ら  
“住み開く”

筆者の自宅兼オフィスであるスペース。2012年の春、大阪から琵琶湖に近い大津市の長屋に転居し、築50年ほどの長屋を建築に携わる友人たちとともにプチリノベーションした。時折、Facebookなどで参加を呼びかけてトークイベントを開催。大阪と東京の知人と、滋賀で活動する知人とをつなぐ役割を少しずつ実践している。

Project 3



千代の家

(大阪市福島区)

写真で  
人びとを  
つなぐサロン

長年の間、ご主人と写真館を経営してきた藤井千代栄さん。還暦を迎え、館を閉めたら世間とのつながりが保てなくなると考え、元写真スタジオだった店舗付住宅を、2010年よりサロンに開放した。これまでのキャリアを生かして「写真整理楽」というワークショップを目玉に、さまざまな世代が交流する場づくりにいそしむ。

Project 2



2畳大学

(大阪市中央区)

下町の一角に  
開講した  
小さな学び舎

職業訓練施設で企画コーディネーターとして働く30代前半の梅山晃佑さんが、長屋の2畳間を「大学」として2008年より開放。仕事の合間に、誰もが講師・生徒になれる自宅大学を開講し「学び」や「働き方」をテーマに一貫した社会活動を行う。また、梅山さんは会社の事業として2012年より自宅近所でコワーキングスペース「往来」も運営中。

Project 1



208 南森町

(大阪市北区)

「住み開き」  
誕生の地

筆者がはじめに取り組んだ「住み開き」スペース。シェアメンバの推薦による月例ゲストトークサロン「SHOWCASE」は合計65回にまで及び、「住み開き」というコンセプトはこの実践から生み出された。2010年以降は、常連だった参加者によって古木屋兼サロンとして運営され、人的ネットワークが引き継がれている。



## 「場」をつくる。

美術や音楽が  
人びとの間のボーダーを取り去り、  
コミュニケーションをつないでいく。  
芸術文化を生み出す  
さまざまな「サードプレイス」の提案。

## 「住み開き」

好きなことをきっかけに、プライベートな  
スペースを、他者へ向け、ちょっとだけ開いてみる。  
いったいどこからどこまでが  
私生活で、仕事で、趣味で、というボーダーが、  
日々更新され続けている。